

## 仏塔信仰としての bhakti

### —法華經と bhakti 信—

關 戸 法 夫

Bhakti は、神への信愛と解釈され仏教經典に散見される śraddhā と峻別される<sup>1)</sup>。法華經にみられる仏（舍利）塔に対する法華教徒の心情が、bhakti と見做されうる場合がある<sup>2)</sup>。

本稿では、仏塔信仰のもつ bhakti に視座をあて、法華教徒は仏塔に対して bhakti という心情を有していたのではなかろうかという仮説施設作業を行うことを目的とする。

『法華經』の「寿量品」に説かれる仏陀の寿量の長遠への信仰は仏塔信仰という bhakti 信の現われと理解され、Gitā 等にもみられる bhakti<sup>3)</sup> という信仰形態が、法華經の仏塔信仰へと推移して、仏塔信仰は bhakti の延長線上に位置するであろうという特徴を指摘できるかもしれない。仏教では、仏陀は永遠の法を悟り、法を教示した人師であり、崇拜の対象ではない。仏教徒は仏陀の説いた教法に śraddhā, prasāda, adhimukti したのであり、仏陀への bhakti を捧げたのではない<sup>4)</sup>。仏陀滅後、歴史性を超越した教法こそが仏陀の本質であるという考えの下に、『法華經』の「寿量品」には、仏陀の寿命は長遠であり、常住不変であることが説かれており、この人格存在としての仏陀の常住性を象徴するものが塔である。塔に祀られてあるものは、仏陀のなきがら、舍利である。しかし、それを媒介として、法華教徒たちは長遠なる仏陀を塔に見立てるのである<sup>5)</sup>。法華經は教法である。その經卷を舍利になぞらえて礼拜の対象とし、仏塔崇拜、そして經卷崇拜を行う<sup>6)</sup>。「分別功德品」に塔 (stūpa) に関して、塔寺・僧坊・衆僧供養の三を併挙している。梵本で stūpa に対し、什訳は塔寺、正法華では塔廟、西蔵訳には mchod rten, gtsug lag khañ とある。

従って、什訳の塔寺は stūpa と解釈される。法華經において、法師品が仏塔に関連をもった dharma-bhāṇaka<sup>7)</sup> に流通の使命を負わせており、貝宝塔品に、宝塔の涌現を現わし、勸持品、安樂行品に、法華經を流通すべき使命を担った者の心構えを説明し、そして、涌出品に、地涌の菩薩に沙婆世界 (sahalokadhātu) に

おける法華經の流通を付嘱する。ここに仏塔と dharma-bhāṇaka との密接な関係が浮かび上がる。

金倉円照博士によれば<sup>8)</sup>、法華經と外教とはインド精神から咲き出た両手の花というべきであり、両者の相似よりも、むしろ相違する点を重視すべきであろうといわれ、今西順吉教授は<sup>9)</sup>、金倉円照博士を踏襲しつつ、法華經より 2, 3 の例文を引用し、法華經が『R̥g-veda』の原人讃歌や『Bhagavat-gītā』の巨大な神のイメージに引き寄せられている印象を受けることは否定できないであろうと示唆されている。金倉博士の指摘される法華經と外教との相似点は bhakti 信という心情を持ちながらも、信仰形態の上で相違し、仏塔への bhakti 信と、ヒンドゥー教の神への bhakti であろうと推定される。今西教授の主張される『R̥g-veda』や『Bhagavat-gītā』等のインド文献に特徴的な巨大な神への Bhakti のイメージと『法華經』「貝宝塔品」<sup>10)</sup>に登場する高さ五百由旬の七宝の塔が大地より涌现したという巨大な仏塔のイメージとは重なりあうように思われる。

平川彰博士は「大乘經典に展開されている仏陀觀は仏陀なきあとの弟子たちの考えた仏陀觀であるから、実際に仏陀が存在した時の弟子たちのみた仏陀觀、すなわち原始仏教時代の仏陀觀とは異質的なものがある。」とする。仏陀滅後には舍利塔を建ててこれを供養するという思想が法華經に濃厚にある。これは bhakti 思想に起因する一つのあらわれとみなしうるものではなからうか。

原始仏教における信 (śraddhā) より大乘仏教の仏塔信仰 (stūpa-bhakti) への移行は原実博士が、『古典インドの苦行』<sup>11)</sup>に指摘され、MBh. における苦行 (tapas) より信愛 (bhakti) への移行は、丁度、仏典における信 (śraddhā) より仏塔崇拜 (stūpa-bhakti) への、難行道より易行道への転換とよく似ているように思われる。

MBh. と法華經の成立年代に関しては、MBh. は紀元前後、法華經は上限を世紀から二世紀下限を二世紀中葉から末期の西北インドといわれている<sup>12)</sup>。

仏典に現われたる bhakti 信に関しては、石上善応教授の詳細にして、厳密な研究がなされており<sup>13)</sup>、それによると、教理的性格の薄い bhakti という語は仏典には用例が少ないが、後世程頻出度が高くなるのも仏陀讃仰の現われであり、アバダーナ文学、ストートラや密教関係に多く、特に仏陀讃歎の詩、百余偈の Bhaktiśataka に至り極限に達するという。

『俱舍論』に仏塔供養について bhakti という語が用いられ<sup>14)</sup>、仏塔に参集する人々の仏陀に対する心情は Bhakti の心情に通じるものがあつたであろうと考えられる。その根拠は、信徒が仏塔に財物を布施する場合、施物を享受すべき仏

陀がすでにいないのに、その信徒になぜ福德 (puṇya) が生じるのかという問いに対する答に見い出される。

「三宝別体説」によれば、仏塔に献上された財物は仏宝に属するものであり、僧伽がそれを受領することはできない。ヴァスバンドゥはいう。福德は二種あり、それは施捨 (tyāga) と受用 (paribhoga) とに由来する。

すなわち、施すことそれ自体によって生じるものと、施しに値するものを受けとった者がそれを享受 (paribhoga) することによって生じるものがあり、制多 (caitya) に対する (布施) は、施捨に由来する福德である<sup>15)</sup>。

布施を受けとるべき者が誰もいない場合には、いかなる者をも提益することがないことになるが、もし福德は他人を摂益することのみによってあるならば、慈等の四無量心 (catvāryapramāṇāni; maitri karuṇā, muditā, upekṣā) と正見との修習においては、福德は生じないであろう。自己が四無量心を修習しても、他人を摂益するわけではなく、正見を修習しても他人が受益者となるわけではない。しかし、慈等の四無量心も正見も福德を生じるのである。

慈等の四無量心においては、受け取る者 (pratigrāhaka) または他人を摂益 (parānugraha) することがなくても、自らの心の力によって福德となると同じように、有徳者 (であった仏陀) は已に過去していても、仏陀に対する信愛 (bhakti) によって造られた (布施) は、自分の心によって福德となると予想される。反論として、もし福德が心によってのみ生じるのであれば、布施 (dāna) と尊敬 (māna) などの作業は無益なものとなろうという。ヴァスバンドゥは答える。そうではない。その行為を生起させる信愛 (bhakti) は (行為を伴わない信愛よりも) 一層顕著であるからである。例えば、仇敵を殺害しようという意図をもつ者がそれ (殺害の意図) によって生起された身・語の行為を、仇敵が已に死んでいるのにも拘らず、仇敵であるという想いに基づいて行なえば、その者には多くの非福・罪 (apuṇya) が生じるが、(行為の伴わない) 意図のみによっては罪が生じないように、師 (である仏陀) は已に過去したのに、師への信愛 (bhakti) によって生起された布施と尊敬の行為をなす者には、更に多くの福德が生じるが、信愛だけでは更に多くの福德は生じない<sup>16)</sup>。(以下、称友の詳細な注釈が続く。)

以上より明らかなことは、仏陀は滅度したにもかかわらず、仏陀への信愛 (bhakti) により生み出された布施や尊敬で仏陀を崇拝する者に福德が多くなるが、bhakti だけでは福德は多大にならない。つまり、bhakti とともに布施と崇拝とを勧請していると解釈されよう。

平川彰博士によれば、仏塔信仰の背後にある仏陀観を深化し、「寿量品」において「仏寿無量」の教理を展開し、さらに方便品において、諸法実相、一乗の教理を説き、この二つの教理を総合する場として、仏塔を活用している。法華經には、仏陀の滅後に、仏陀を供養礼拝するために仏塔を建てるのが「方便品」「見宝塔品」に強調される。

正法の永遠性の証明は、塔によって象徴せられているのである。塔の中には、如来の舍利が祀られている。塔は仏陀の人格の具現である。人格存在としての仏陀の常住性を象徴するものが塔である。仏塔が仏陀そのものとみなされ、その塔である仏陀に bhakti 信を捧げるようになったと考えられるのである。

久遠の教法である仏塔を仏陀として讃仰するに至った「見宝塔品」に、  
dhāreti yo idaṃ sūtram sa dhāre jina-Vigraham //35// KN 255. 10.

若有能持 則持佛身 (大正藏 9. 34 中 p. 110a6, No. 255. 10)

とあり、「この經」とは Saddharmapuṇḍarika-sūtra という法 (dharma) であり、仏陀滅後の仏陀であり、それをよく持つ者はジナ (仏陀) を持つことになるという。

ここで問題となるのは、塔と經卷に関してである。この点について、塚本啓祥博士は「舍利 (śarira; 法師品以前では dhātu を用う) を安置した塔 (stūpa) の建立と供養を否定して、經卷を奉安した支提 (caitya) の建立と供養を勧奨するのであるが、その理由として、支提中に如来の全体の舍利、すなわち全身があるからであるとする。——法華經の法師品は、經卷を具象的に如来の全身と見做すことによって、法身の表示を志向したものと考えられよう。」と主張されている。

三友量順博士は、經卷供養という視点に立って、經卷に如来の遺骨の全体が安置されているということがいわれ、仏舍利と經卷との同視が端的に言い表わされていると論証されている。

ここでは、caitya には如来の舍利 (śarira) は安置される必要はなく、caitya において法師 (dharma-bhāṇaka) によって、法華經が説かれる場合には、すでにそこには如来の遺骨の全体が祀られているのであるから、建てられている caitya を stūpa と表現していることになる。久保継成博士は、『法華經菩薩思想の基礎』へ「分別功德品」に、caitya と stūpa との関係が、經卷 (pustaka) と法師 (dharma-bhāṇaka) と仏塔信仰を念頭に置いたと思われる舍利との関連において、明解に述べられていると結論づけている。

万有をその身体の中に現わし出すという觀念が『バガヴァッド・ギーター』と

『法華經』に共通していることは否定できないであろう。

例えば、『法華經』「法師功德品第19」に、

あらゆるものと衆生は、悉く中において (tasminn ātmabhāve pariśuddhe) 現われん。

苦しくは声聞・辟支仏・菩薩・諸仏の説法は、皆身中においてその色像を現わさん。(大正藏第9巻, p. 49 以下, 尚, ātmabhāva は身体 (kāya) の意味に用いられている。)

仏塔信仰は大乗仏教一般の基盤となっているのであるが、『法華經』が多くの個所で仏塔供養に触れ、『法華經』そのものに「見宝塔品」という品名を擁することは、法華教徒が仏塔信仰になみなみならぬ関心をもっていたことの証左になるであろうし、又、仏塔信仰に関する『法華經』の姿勢は各品によって異なり、序品・方便品では仏舎利信仰、舎利供養の奨励であるが、法師 (dharma-bhāṇaka) としての法華教徒の教導者が登場する法師品や分別功德品では舎利信仰より経巻信仰 (pustaka-pūjā) に移行しているという点に問題がある。これは刈谷定彦博士の指摘される如く、法華教徒が仏塔信仰に行きづまりを感じたのではなかろうか。その解決策として、『俱舎論』に説かれた、布施と尊敬を伴った bhakti, それが見宝塔品において、仏塔信仰と經典崇拜が綱合されて、仏陀への bhakti へと高まっていたであろうと特徴づけられるのである。

法華教徒の教導者である法師 (dharma-bhāṇaka) は西暦前二世紀頃には仏塔に関係をもち<sup>1)</sup>、巡礼の俗人信者を対象として、讃仏供養、經典暗誦を取り行ないながら説法していたものと考ええるならば、bhakti という心情を堅持した dharma-bhāṇaka は仏塔建立を奨励し、仏塔への布施供養、そして経巻への崇拜を促したとするならば、当然、dharma-bhāṇaka たちの心情は bhakti を含んでたと結論できるのである。

ただし、ヒンドゥー教諸派と峻別させるためにも、あくまでも仏塔信仰としての bhakti を基調におきながら、法華教徒としての心情を保持していたのではないかと思われる。

1) Hara, Minoru, "Note on Two Sanskrit Religious Terms: Bhakti and Śraddhā", IJ. VII 1964, pp. 124—145, 藤田宏達「原始仏教における信の形態」『北海道大学文学部紀要』6, 1957年, pp. 65—110, E.W. Hopkins, "The Epic Use of Bhagavat and Bhakti," JRAS, 1911, p. p727—738.

2) 平川彰『初期大乗仏教の研究Ⅱ』1990, pp. 443—483, 同『大乗仏教の教理と教団』1989, 「pp. 463—468.

3) R.C. Bhandarkar: Vaiṣṇavism, Śaivism and Minor Religious Systems, Strassburg 1913, H. Raychaudhuri: Materials for the Study of the Early History of

- the Vaiṣṇava Sect, Calcutta, 1920. Suvira Jaiswal: The Origin and Development of Vaiṣṇavism (Vaiṣṇavism from 200 B.C. to A.D. 500), Delhi 1967. 辻直四郎『バガヴァッド・ギーター』1980. Franklin Edgerton, The Bhagavad Gītā translated and interpreted, 1972. 上村勝彦『バガヴァッド・ギーター』1992.
- 4) 塚本啓祥「法華經に現われる信」(仏教学, 第9・10合併号, 仏教学研究會, 昭和55年。『法華經』に見られる「信」として adhimukti と śraddhā さらに信確立の行の三者をあげ, 經における用例について検討しておられる。
  - 5) 塚本啓祥「インドにおける 仏塔信仰と法華經の交渉」(野村耀昌編『法華經信仰の諸形態』。『バガヴァッド・ギーター』第11章 Kṛṣṇa の示現と『法華經』第11章の「見宝塔品」との関係。
  - 6) 三友量順「法華經にみられる四处の変化」(印仏研, 第27巻第2号, 昭和54年), 『法華經』に見られる四处の記述とチャイティヤ崇拜」(『仏教教理の研究・田村芳朗博士還暦記念論集』昭和57年), 荻谷定彦「初期大乘仏教と仏塔信仰」(仏教学研究,
  - 7) 塚本啓祥「インド社会と法華經の交渉—dharma-bhāṇaka に関連して—」(『法華經の思想と文化』坂本幸男編) 昭和55年 pp. 31—66.
  - 8) 金倉圓照「インド社会と法華經の交渉(序説)」(『法華經の思想と文化』坂本幸男編) 昭和55年, pp. 3—30. 同「仏身觀と外教の交渉」(中村瑞隆編『法華經の思想と基盤』1980, pp. 5—7)。
  - 9) 今西順吉「『ギーター』の神觀念と大乘仏教」印仏研第39巻第2号, pp. 276—282.
  - 10) 『初期大乘仏教の研究』(平川彰著作集第3巻) 1989, pp. 16—17.
  - 11) 原実『古典インドの苦行』。
  - 12) 久保継成「『法華經』の成立年代」(『法華經菩薩思想の基礎』昭和62年, pp. 17—21) に詳論されている。
  - 13) 石上善應「仏典に現われた bhakti 信の用例」(『印度学仏教学研究』第8巻第2号 昭和35年, pp. 79—86. 山田龍城『大乘仏教成立論序説』1959, p. 196. 浄土思想を研究するには『ギーター』bhakti の思想を見逃しえないと指摘される。
  - 14) Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra, ed. by U. Wogihara, p. 436.
  - 15) L'Abhidharmakośa de Vasubandhu, par V. Poussin, tom. IV, 1924, p. 245, p. 244 note; ditto; Prasannapadā, p. 309ff (p. 309 nt. 4). tadbhaktikṛtam は漢訳では「追申=敬養」(大正藏29, 97b), 「敬事心所作」(大正藏29, 251b) とある。
  - 16) Abhidharmakośabhāṣya, ed. P. Pradhan, Patna, 1967, p. 272, 5—18 (W. 121 ab)。舟橋一哉『俱舍論の原典解明業品』pp. 511—514, 同『業の研究』pp. 365—8, (—prabhavan, 「力によって」の意味に解釈される。因みに, 玄奘は「從自心生」, 真諦は「從自心起」と訳している。西藏訳は梵文と同じ。
  - 17) 平川彰前掲書 pp. 403—484, 久保継成前掲書 pp. 227—266, p. 294.

〈キーワード〉 仏塔信仰, bhakti, Stūpa-bhakti, dharma-bhāṇaka, 見宝塔品

(東方研究会専任研究員, Ph.D.)